

シヨタと熟女の夏休み



うさぎロボ 著

## 一章 成長していた（特に下半身が）甥っ子

一戸建ての日本建築の玄関前。

スマホで話す女。英語だった。日本人。三〇行くかどうか。

若いといえば若い、熟女の入り口だろう。なぜサッカーボール二つ抱えているのか一瞬驚いてしまうほどの爆乳。

しかし独身で、恋人もいない。

まじめで、そこそこ美人で性格悪くない、要は色恋にあまり向いていない控えめなタイプ。

仕事は翻訳。留学経験もあり、恋人といえる相手はそちらで付き合い合った外国人がすべて。というところ日本の男はだめだ、と言い出す「意識高い系」のようだが、そんなことは全くなかった。

日本の男はもっと強引に来てほしいな、と思うぐらいのことだ。

まあ、若いうちはそれでよかったが、最近は多少不安になりつつあった。

そんな爆乳熟女、藤巻弘美は今度の翻訳の仕事の話を終え、実家の玄関を開ける。

お帰り、とってくるのは姉。それに両親。婿養子の義兄の姿はない。

蝉の鳴き声が響く夏休みだが、働く大人にはあまり関係ない。

「ただいま。ケンちゃんは？」

「ほら、賢治。おばちゃんにあいさつ」

——おばちゃんはやめろ。姉ちゃんのほうが当然年上でしょうが。ああ、姉ちゃんはそういうの気にしないんだろうな。だって結婚して子供もいるもんね。

甥っ子、賢治。

独身で子供もない弘美は結構かわいがってきたつもりだ。つもりというか、事実かわいがってきたのだが。

姉の言葉に、その後ろに甥っ子が隠れているのに気づいた。

「どうしたのケンちゃん？」

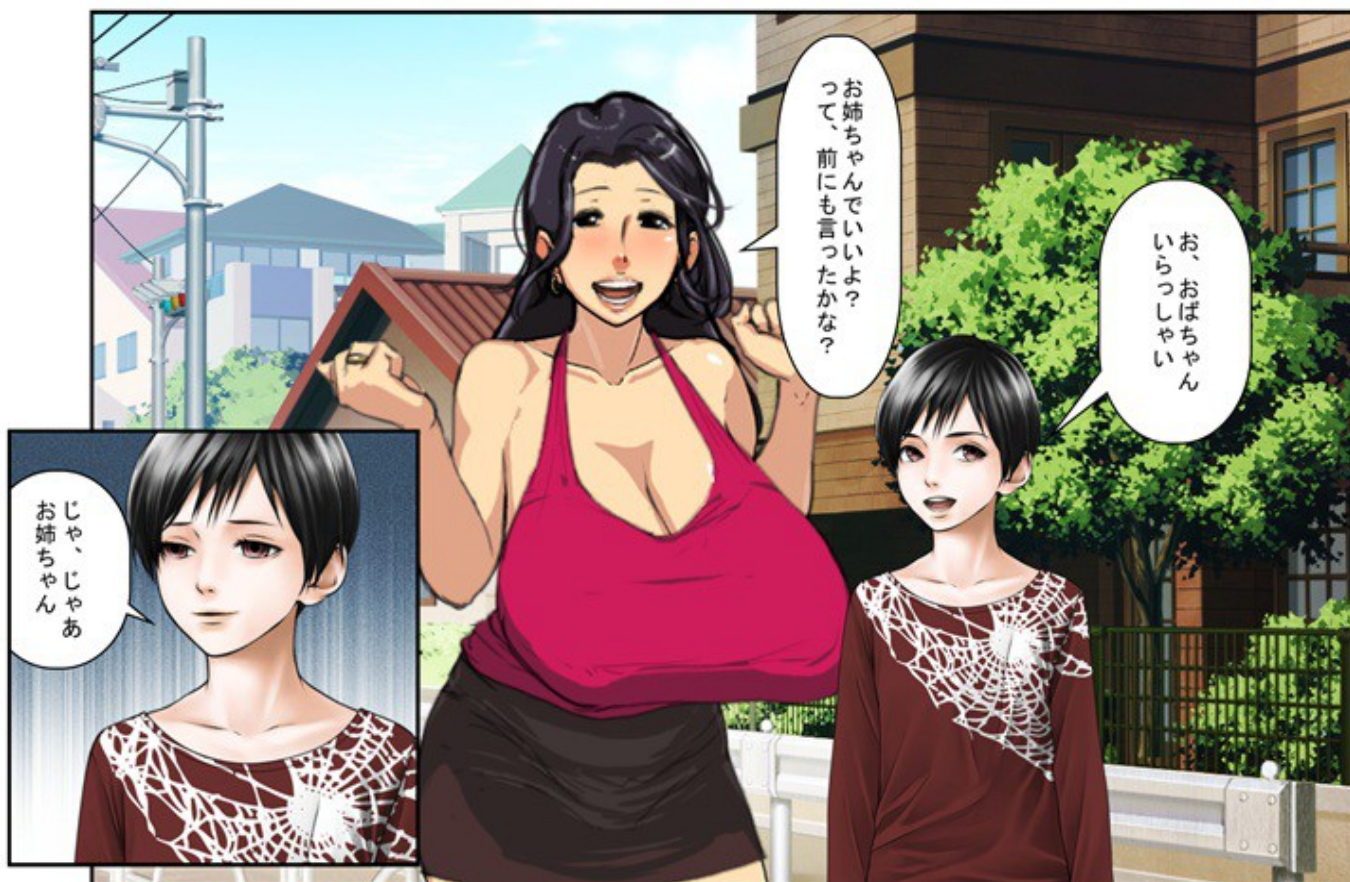
仕事の都合でしばらく帰郷に間が開いて、忘れられたか。

——少年というにはやや小さいショタ年齢だけど、幼児というには巨大すぎるよねえ。忘れるわけがないわ、となればもしかしたら……異性を感じるというか。私この通り、見た目もいいしオッパイもデカいしねえ、年ごろになりつつある男の子には退かれるのかな？ さみしい気もするけど、まだまだいけるって気もして嬉しくもあるわ。

「お、おばちゃんいらっしやい」

「お姉ちゃんていいよ？ って、前にも言ったかな？」

「じゃ、じゃあお姉ちゃん」



——まじめなタイプに育ったのね。いいわ。かわいい。

押し出されてくるショタの前にしゃがみ、頭をなでる。

まだまだ圧倒的に小さい。というか同年輩の中でも賢治は小柄だろうと思えた。

——これなら絶対同級生の女子より小さいわ。平均身長比べたら女子のほうがデカイ年代だもんね。このおとなしさじゃ女子にやられてるんじゃないかな？ それはそれで女子いじめるよりかわいいけどね。

考えつつ、チラ、と短パンの前を見る。

——体格は変わらないけど、こっちは成長したかな？ もう一緒にお風呂って年でもないかな。ちょっと残念ね……でもこの恥ずかしがり様じゃね。無理してそういうの……って私向いてないし。

「弘美、悪いけどちょっと出かけてくるわ」

「え？ 朝から？」

「そう。で、悪いんだけど、プール教室あるから、この子おくって行ってあげて」

「水泳習ってるんだ。じゃあ将来金メダルね」

何も考えていないセリフを吐く弘美。ちょっとうれしそうな賢治を見下ろし、彼女もうれしくなる。

あわただしく出かける姉と両親を見送る弘美。

「じゃ、何時から？」

「九時から」

「それじゃ、もうすぐね。準備はわかる？」

「水着に着替えるだけだから」

「そう」

——向こうで着替えないんだ？ あは、そうか、恥ずかしいのね。クラスにも絶対おチンチ〇見せない子がいたもんね。ドリルチンチ〇が普通の年代なんだから小さいの気にしてじゃないよね。剥けてたりデカかったりしたのかな？ いや、ただ恥ずかしいってだけかな？

奥に入っていく賢治の小さな肩を見つつ、顔が赤らむ弘美。

——かわいいわね。前からそうだったけど。いい感じに育ったわ。だめね、こんなこと思ってるんじゃお風呂と一緒に入るわけにはいかないわ。

まじめで、神経質な方の弘美。

荷物を置いて、しばらくしてから賢治の部屋に向かう。

居間の戸を開ける。

「あっ」

「あら、ごめん」

何をしていたのか、今着替え中の賢治。

運悪くというか、叔母の方を向いていた。全裸である。

慌てて戸を閉める弘美。

だが、目はついつい普段なら隠されている部分を見てしまう。

驚く甥っ子の顔を見て、一瞬で下を撫でる。

撫でて、ぎよっとなる。

——え？ 大きい？

通り過ぎた目を戻し、まじまじと見てしまう。

——いやいや、そんなデカいわけないでしょ。見間違い見間違い……

見間違いではなかった。

細い太ももの付け根から生える驚くほど太い茎がほとんど膝の間まで垂れるのを。皮を戻そうにも戻しようがなさそうな発達した頭が揺れていた。

あまりのものに呆然となりそうになるが、そこは抑える。

外に出て戸を閉め、背中を向ける。

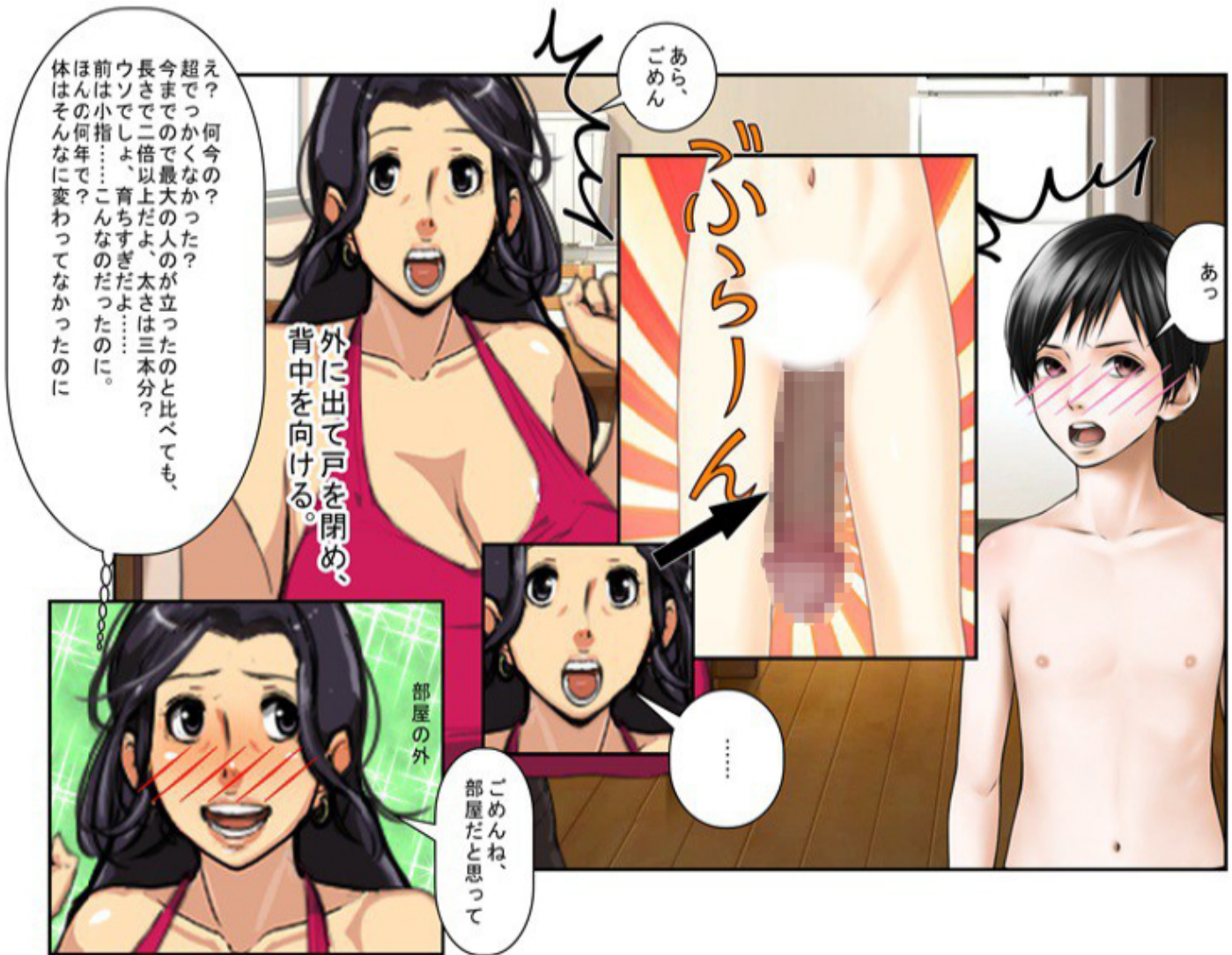
「ごめんね、部屋だと思って」

「う、うん……いいけど」

慌てて海パンを着る賢治。

爆乳を抑える弘美。顔が真っ赤になる。

——え？ 何今の？ 超でっかくなかった？ 今までので最大の人ののが立ったのと比べても、長さで二倍以上だよ、太さは三本分？ ウソでしょ、育ちすぎだよ……前は小指……こんなのがあったのに。ほんの何年で？ 体はそんなに変わってなかったのに……



「お、お姉ちゃん」

「な、なに？」

「今見たこと、人に話さないでね？」

「ん、なんで？」

「だ、だって大きいの、恥ずかしいし……そんなに大きくないけど」

——いや、超巨根だし！ いやいや、それ大きくないとか怒られるでしょ？ アメリカでも、日本でも、彼氏のどのぐらい……ってのは話したけど、そんなデカイのなんて聞いたことないって……それもこっちは大人の話なのよ？

ドクンドクンと早鐘のように弘美の心臓が脈打つ。

——うわ、嘘……信じられない。ジャックのこのぐらいだったよね？ って誰に聞いてんのって話だけど。何年も前だから顔ははっきり覚えてないけど、こっちのほうは覚えてる。だって**最後に見たチ○コだし**。ブラブラしてたのに、ジャックのより遥かにデカイよ。ジャックは周りにデカイって言われてたのに……どんだけ大きい、ケンちゃんの。

巨大だったことが問題だろうか。

久しぶりに見たことが問題だろうか。

それらがかわいいショタ甥のものであることが問題だろうか。

おそらく弘美の興奮と混乱はそれらの複合が原因だろう。

立ち尽くし、しばし何も考えられない。

その間に、海パンの上にスパッツを穿いて別の襦を開けて外に出る賢治。

——ああ、おばちゃんにチ○コ見られた。どうしよう？ どうもしないけど、恥ずかしい。やっぱり大きいとか思われたのかな？ でもお父さんのはもっと大きいから、大人よりは小さいと思ってくれたかな？ でも、愛ちゃんたちはパパのより大きいって言うし……ああ、恥ずかしい。

思いつつ、ふらふらと玄関を出る。

と、三人の同じ年ぐらいのロリが通りかかる。

ぐらいというか、クラスメイト。

「あ、お馬さんだ」

「あは、水泳に行くんだね」

「パンツからアレでないように気を付けてね」

「あ、愛ちゃん優ちゃん望ちゃん……」

「相変わらず前もっこりだねえ」

「パンツの紐切れないの？」

「ジャンプしてよ！ アソコがオッパイみたいに揺れて面白いから！」

「ぎゃははは！」

かわいらしい見た目からは想像できないようなことを言いながら近づいてくるロリ。

顔を赤くして腰を引く賢治。

その後ろに素早く回り込むロリ二人。

前に愛ちゃん。

小柄なロリ、賢治と同じぐらいの背丈だ。残りの二人も小柄だが、賢治よりは背が高い。

「海パンちゃんと着てるかチェックしてあげるよ」

「き、着てるよ。ああっ、やめて」

一人が真後ろに回り、羽交い絞めにする。

オッパイなどかけらもないロリであるから、何か押し付けられた感触など微塵も感じない——むしろ腹のほうが出ている。

まあ全身柔らかく、薄く甘ったるい匂いがしてちょっとクラっとすることは事実ではある。

が、そのロリたちに**追い込みをかけられている**賢治はそれらを楽しむ余裕はない。

「やだあ！」

「おとなしくしろ！ さもないと……」

「優ちゃんやっちゃえ！」

しゃがむ愛ちゃん。

賢治を見上げる。

膝を慌てて締める賢治だが、遅い。

パシ、と軽く掌で股間を覆うように叩く愛ちゃん。

「はぐろう！」



「キ〇タマ潰し玉潰し！ 男子にはこれだよね！」

「ひいひい」

——これで男子を支配してるんだ。鬼畜だよこいつら……い、痛い……玉が……

「ぐうううう」

唇を噛み、あらぬ方向を見つつ腰を引くぐらいしかできないことがない賢治。

爆笑するロリたち。

「きゃはは、超痛そう！」

「ぐうううう、ですってよ！」

「もうタマタマやられたくないなら、おとなしくするのよ？」

「わ、わかった……」

「それじゃ……ズボン下ろして」

愛ちゃんと優ちゃんがズボンを掴み、勢いよく引き下ろす。

当然というか、下の海パンまで。

——うわ、やっぱり海パンまで下ろすんだ。

四人は敷地と外を隔てる門の少し前。

賢治を探しに玄関を出た弘美はそれを玄関の近くから隠れて覗いていた。

顔を赤らめ、成り行きを見ている。

——いや、大胆ねえロリちゃんたちは……っていうか、「不意に勃起したらヤバいから、パンツずり下す時は気を付けない」とか全く考えてないわ。無垢そのものね。……まあ友達の子フルチンにする無垢ってのもあれだけど。ま、変なこと考えてたらやらないことではあるわよね。

愛ちゃんがぶらつく巨棒を指さして笑う。

「ぎゃははは！ やだ、キモ！ 超デカいんですけど！」

「お兄ちゃんのよりでっかい！」

「私のお兄ちゃんのよりも！ お風呂で洗ってあげたとき、このぐらいになるんだけど……七割程度しかないよ！ 粗チンっていうんだよね！」

——いやいや、その七割はデ○チンだから……っていうか、ロリ妹にチ○コ洗わせるって。クソなのか細かいこと気にしないいいお兄ちゃんなのか微妙な話ね。

「ぶらぶらしてるよ！」

「やめ……はう！」

「はいゲット」

巨棒の背後、これもロリの小さな手には明らかに余る巨玉だが、根元を握って締め上げるロリ。

——ちょ、玉握った？ っていうかタマタマもデカ！ あの大きさの玉握れるとか、超慣れてる！

**玉握りに慣れたロリ**とか……やばいわね！

つま先立ちの賢治。

「授業で習ったもんねー、ここは男の子の一番弱いところだって」

「潰れちゃってもナノテクですぐ治るから、女の子は遠慮なく狙っていけて先生言ってたもんね」

「タマタマと同じ固さのボールを二個袋に入れて握り潰したんだよ」

「ひいいい」

——最近ますます女子の金責めが激しくなってるのはそのせいなんだ……ひどいよ授業でそんなこと教えるなんて……先生も女だから、そういうの平気なんだ……

震える賢治。

聞いていて、思わず微笑む弘美。

——そうそう！ うさぎ県では「女子による護身術」が必修なのよね！ 私も習ったわ。**疑似拳丸の握り潰し体験**まだやってるんだ。ただでさえ体格で劣るのに、女子だけ特別にそういう授業受けてたら勝てるわけないわよね。特にケンちゃん気弱そうだし。

と、玉を握る愛ちゃんの横で、優ちゃんが巨棒を握って引っ張り出す。

「ぎゃはは、伸びる伸びる」

「一メートルぐらい伸びない？」

「二メートル目指そう！」



「ひいっ！ 千切れるっ！」

「千切れないし、千切れてもほら、ナノ薬持ってるから大丈夫」

「そうだよ、すぐ治る」

「いや痛いから、痛いから！」

真っ青の賢治。

笑いが止まらないロリたち。

特に、引っ張っている優ちゃん。

——バカねえ、本当におチンチ〇引っこ抜くわけないでしょ？ っていうか抜けないって、私の力なんかじゃ。今までも抜けなかったしね。丈夫なんだよここは。お兄ちゃんと喧嘩して思いきりタマタマ蹴り上げて潰れなかったもん、泡吹いて気絶しちゃっただけで。おチンチ〇はタマタマより丈夫でしょ？ なら平気平気。っていうか私ら初めからチンチ〇ないけどこんなもんいらんし、もし取れちゃっても平気だよ。ま、治るんだけどね。

「ほひひひひひひひ！」

「ほひひひひひひひ！」

「見てみて！ 賢治のアソコ、千切れそうだよ！ 賢治、千切れちゃうぞ！ 大事なものを、ブチっといくよー、いくよー」

「ぎゃはははは！ じゃあ女子になれるね」

「いや「なる」というプラスの感覚じゃなくて「なっちゃう」っていう転落の感覚……ほごおおおお！」

「男子より女の子様のほうが上なんだから、もちろん「なる」という表現が正解。文句あるならキャン玉潰すよ？」

「ないですないですううう！」

ロリに巨棒を引き千切られ、巨玉を握り潰され、狂乱の体の賢治。

いや、実際には千切れても潰れてもいないが、賢治の主観的にはいつそうなるかわからない恐怖の真ただ中だった。

**ドS女子の割合が世界一**といわれるうさぎ県のロリたちはそのさまを見ながら、頬を赤らめ、下腹部が熱くなるのを感じていた。それがどういう意味かはわかっていないが、その気持ちよさを求めてこうして賢治を責めているのだった。

それをさらに離れたところから見ている弘美。

——かわいい女の子にチンチ〇いじられてある意味ケンちゃん楽しそうといえなくもないけど……そろそろ行かないとプールに遅れるわ。となれば……声かけて……文句言って揉めるとかは面倒なんで、「大人が近づいてる」と気づかせる感じで。

「ケンちゃん、どこ？」

「あ、ヤベ」

「お馬さん、この事いってもいいよ？」

「そうそう、「女の子におチンチ〇いじめられた」って言っちゃえよ」

「私が男なら絶対嫌だけどね、そんなこと言うの！」

——こういつときゃ、恥ずかしかって何も言わないからね！ 男が女にやられるの恥ずかしいって……大人ならまだしも、私らの年だと男子のほうが小さいし、にもかかわらず急所ぶら下げてるんじゃこうなっても仕方ないのにね？ 男のプライド面白！

ゲラゲラ笑いながら走り去るロリたち。

その場に倒れ込む賢治だが、しばらくして何とかズボンと海パンを上げる。

——ううう、無茶苦茶だよ。いじめられたとか、そういうレベルじゃない。車にはねられた様なもん、むしろ通り魔に近いからコレ……おばちゃんには知られないようにしないと……心配される……

フラフラと立ち上がった所に、やっと顔を出す弘美。

「ケンちゃん、そろそろ行こうか。車に乗って」

「あ、はい」

爆乳を揺らして踵を返す弘美。

思わず目を剥き、唾をのむ賢治。

——やっぱり大人がいいな。ロリはクソ、ロリはクソ、ロリはクソ。

というより走り去った三人組の個別の問題ではないだろうか。

とはいえ、大人がいいかというところも疑問だ。

——いや、面白いもん見せてもらったわ。ケンちゃんほんとにかわいいわねえ。私もでっかいおチ○ポかわいがってあげたいわ。でもまあ妄想で終わらせたほうがお互い幸せよね。

弄りまわされていた甥っ子の男のシンボルを思い出しながら、内心にやける弘美。

とはいえ、直接手を出そうとは思わない。

——妄想妄想。子供相手にまずいでしょ。大体、ばれたら親族関係切られちゃうわよ。そこまで性欲のために何かってねえ……別にシヨタじゃないし。

基本まじめな爆乳熟女だった。

体験版終わり

この後巨根シヨタ、徐々に熟女たちに食われて行きます

爆乳水泳コーチやその保険室の先生、それに叔母さん

シヨタの巨根に驚き、大喜びで食ってくれます

続きは製品版でお楽しみください